

H23 年度科学・技術関係予算概算要求 個別施策ヒアリング
【施策番号 24189：学術国際交流事業（JSPS）（文部科学省）】

- 1 日時：平成 22 年 9 月 14 日 10：41～11：17
- 2 場所：中央合同庁舎 4 号館 12 階共用 1202 会議室
- 3 聴取者：総合科学技術会議議員、白石隆議員、青木玲子議員
内閣府 官房審議官（科学技術政策担当）梶田直揮
政策統括官（科学技術政策担当）付参事官（総括担当）大竹暁
- 4 説明者：文部科学省 科学技術・学術政策局 国際交流官 匂坂克久
- 5 施策概要

覚書等に基づく二国間交流事業や国際的な研究拠点構築を目指す多国間交流事業などを通じた国際共同研究等の実施や、優秀な外国人研究者の効果的な招へい及び我が国と外国人研究者のネットワークの形成支援など、多様なニーズに合わせた学術国際交流を実施する。

6 質疑応答模様

【白石議員】

今年度と比べると、かなり組み替えがされている。例えば、「若手研究者のリンダウ・ノーベル賞受賞者会議への参加支援」は昨年は別の施策の中に入っていた。昨年のヒアリングの時に、「若手研究者のリンダウ・・・」はよいが、海外に留学したことがない人が 1 週間ばかり、国際会議なんかにできることの支援をやってもあまり意味がないと指摘したが、その辺りはどのように改善、対応されたのか。つまり、コストベネフィットが悪いと。

【文部科学省】

昨年は「若手研究者の国際研鑽機会の充実」の施策の中で整理していた。昨年のご指摘を踏まえ、いくつかプログラムを集約する形とした。若手の派遣に重点をおいているものについては、ほかのプログラムに取り組み形とし、予算面では縮小することとした。

昨年の「若手研究者の国際研鑽・・・」のご説明の時に、さまざまのプログラムを海外特別研究員事業と有機的に統合し、さらに充実したものとするべきではないかというご指摘があったかと思う。同じく日本学術振興会実施している国際交流事業のなかで、過去において日本学術振興会の公募事業の採択状況をお決めいただいて、これまでの研究活動の交際交流経験を把握考慮した上で、国際交流事業間の有機的な連携を図るかたちとした。

【内閣府】

金額は組み替えをした等の理由で減少したということで、ニーズがなくなったというわけではないという理解でよいか。

【文部科学省】

然り。

【青木議員】

外国人研究者の招へいというのは、海外の日本人は対象となるのか。

【文部科学省】

基本的には、外国人。ただし、二重国籍で日本人国籍も持っている方など、現地の研究機関の研究者として研究をしている方は対象になる。しかしながら、招へい事業の中で一定の枠を越えないように審査するときの一定の基準はある。

【青木議員】

海外の日本人研究者のネットワークを活用すべきだと思うが、海外の日本人研究者は日本に短期につれてくるのは手間がかからなくてかつ海外の最新の情報が入ってきて有意義。二国間交流で使えるのでは。

【文部科学省】

日系の方がくることもある。日本で研究した人が現地に帰ってネットワークとして同窓会を作っている。原則フェローシップの経験者が同窓会に入る条件だが、日本とその国との交流に期待できる現地で研究している日本人がネットワークに入ることもある。その中で、日本の研究活動一般について現地の人に紹介することは行っている。

【青木議員】

私の言っているのは逆で、海外の大学院生が最近どのような研究を行っているのかは重要な情報で、海外の大学で教えている先生は、その辺をよく知っている。その先生を呼ぶほうが手間がかからないし、最新の情報が効率的に入ってくる。

【文部科学省】

割合は3%と低いが、「外国人研究者の招へい(短期)」プログラムがあり、中堅クラスから教授クラスの方を呼ぶので、そのプログラムを利用して日本に来られる方もいる。

【内閣府】

様式6P.2の成果の欄で2210名派遣、1178名招へい、86件の研究交流、2390名派遣、1303名招へい等とあるが、これは年間か、累積か。毎年度この程度か。

【文部科学省】

年間であり、毎年度この程度の規模である。

【内閣府】

達成目標として、研究者のネットワークの構築となっていて、これだけの研究者が交流していれば、相当のネットワークができているんだろうと想像できるが、一方で、13カ国のネットワークで多いと見るのか少ないと見るのか。どう見たらよいのか。この辺のネットワークづくりは自発的に任せるのか、相当フォローアップされているのか。

【文部科学省】

分布で見ると、欧米、アジアの主要国に数は絞られるが、研究者の多い国、自発的にネットワークをつろうとする国、日本として必要性の高い国を中心として、ネットワークをつくらうとしている。

【白石議員】

何をもって成果と考えるかであるが、数でやるのが簡単。私も、拠点事業を8年くらいやった経験があるが、単に人(の数)ではなく、そこで数年に1冊“本”を出した。この“本”をカウントしてくれると非常によい。“本”がちゃんとコンスタントに出しているところもあれば、そうでないところもある。外国人研究者が来たときに、二ヶ月くらい居たら、

論文の一つを書くことも考えられる。何をもちて成果とするかそのこのところの工夫を何か考えているのか。

【文部科学省】

呼ぶことだけを成果とは考えていない。1年、2年いた場合には、大抵ジャーナル等への論文を投稿、掲載されている。それについては、フォローアップしている。具体的にどれだけの刊行物となったか、フォローするよう努めている。

【白石議員】

これはフォローするのは非常に大変なのはわかるが、ネットワークの有り無しを示すのは、社会科学の分野では論文。日本では日本人だけで書くのが圧倒的。拠点交流をすると日本人が1/3、外国人が2/3で論文集を出す。そこで明らかにネットワークができて、一緒の問題意識のもとで共同研究ができる。理系の場合はチームでやるので、論文上でネットワークが見える形ではいっている。調査するのは大変だが、一橋大の中馬先生はある分野については、ネットワークがどのように形成されているのかは、データベースさえあれば、すぐに分析ができると。なにをもちて成果とするのかところをつつこんだ分析をされるとよい。

【内閣府】

派遣、招へい何人というのもいいが、学術であれば、何カ国と一緒にやった結果、今までと違う新しい学際が生まれたという、量の面だけでなく、質の面でも期待されていると思う。その辺が成果としてあるとわかりやすい。

【内閣府】P1 「先端的研究ネットワーク形成のための場の提供」で、“特に、アジアの優秀な研究者を日本に惹きつける”とあるが、こういう事業は非常に重要である。先のヒアリングで、外務省は、日本の将来のインフラ進出、輸出のため、アジア、世界の人材ネットワークづくり、日本の将来のインフラ輸出を支える人的ネットワークづくりを支える意味で、日本からの若手の進出、アジアからの受入れに支援していきたいといっている。これはこれで結構。それぞれやって頂きたい。

【内閣府】こういう受入れによって、こういう新しい研究になった、ネットワークができたとかいう、ボランティアで研究者に報告してもらわざるを得ないのは仕方ないが、このようなサクセスストーリー（ベストプラクティス）は重要で、願わくは、政策立案にも繋がったという話ができるとなお一層良い。

以上